

大槻福子 提出 学位申請論文

『夜の寢覚』の構造と方法―平安後期から中世への展開― 審査報告書

### 論文の内容の要旨

本論文は、平安後期の物語『夜の寢覚』に認められる欠巻部分のうち、特に末尾欠巻部分を中心に、残存する関連資料の徹底した再検討により、従来の研究では解明されていない新たな内容の復元を試みた意欲的な研究である。

論文の構成は、序章、第一部（第一～九章）、第二部（第一〇～一二章）、終章からなる。

第一部「『夜の寢覚』―欠巻部分の復元と物語の構造―」は、九章を要して『夜の寢覚』の末尾欠巻部分を中心に論じている。各章ごとの要点は以下の通りである。

第一章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の復元―新出資料の解釈をめぐる問題―」では、

『夜の寢覚』第四部「末尾欠巻部分」の後半にある「寢覚上偽死事件」以降の物語展開について、近時その存在が確認された『夜寢覚抜書』・『伝慈円筆寢覚物語切』などの資料を再検討することで、寢覚上の偽死事件・出家などの経緯は以下のような展開であったことを推定する。すなわち、「寢覚上は偽死事件後、在俗のまま、子息まさこに発見され、男君とも再会したが、冷泉院（帝）にその所在を察知されることを恐れて隠れ住む。後に、寢覚上は「まさこ勘当事件」を解決しようとして院に許しを願い出たことで、まさこは勘当を許された。寢覚上はその前後に出家するが、後日、まさこの訪問を受け、なお我が子への断ち切れぬ愛着を知る」という内容であったとの想定である。

第二章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の構造―新旧資料の解釈の再検討―」では、第四部「末尾欠巻部分」に描かれていたとされる「寢覚上偽死事件」の具体的な経緯について修正案を提示する。以前は、『無名草子』に記された「死にかへるべきほう」の語句から、寢覚上が「秘法秘薬などにより一旦死んで、蘇った」事件と

解釈されてきたが、「死にかへるべきほう」の用例を厳密に検討することで、「一旦は仮死状態になった寢覚上を、冷泉院が世間には死亡と信じさせておいて取り籠めた事件である」として、帝（冷泉院）の強い関与のもとに生じた事件であると推定する。さらには、その想定のもとに「末尾欠巻部分」の年立についての試案をも提示する。

第三章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の構造補遺」では、第二章の論文を発表した後に指摘された疑問について、改めて当該資料の詳細な解釈を提示する。併せて、帝による女君取り籠めの例が、中世王朝物語『むぐら』にも見られることを参考にしつつ、「偽死事件」の詳細について考察を加えている。

第四章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の資料の解釈とその問題」では、第四部「末尾欠巻部分」の内容に関わって、『無名草子』に記されている「せめては、大臣に隠れ忍びてだに果てたらば、身をもなきになしてもやみなむ」と、『拾遺百番歌合』一五番歌右「見しままの夢のうちにぞまどはるる立ち後れにし身を恨

みつつ」(中宮の歌)の解釈について、従来の研究に対する修正案を示し、前章までに主張してきた「末尾欠巻部分」の推定内容を補強しようとするものである。すなわち、「一筋に身をもなきになしてもやみなむ」は、「(男君も)一筋にわが身を捨てるほど悲しんで終わったことだろう」と男君を主語とする従来の解釈に対して、「(寢覚上は)一筋に出家を果たしもしたことだろう」と寢覚上の出家のことであるとの修正案である。また、『拾遺百番歌合』一五番歌の中宮(石山の姫君)の「立ち後れにし」は、「先に(母上||寢覚上)に出家されて後に取り残された」との従来の解釈に対して、「(母上)に先立たれて(自分が)取り残された」こと、すなわち寢覚上の逝去と捉えるべきであるとの修正案を提起する。なお、近年『夜の寢覚』の一部かとして紹介された専修大学図書館蔵の断簡について、『夜の寢覚』の内容とは認め難いとの判断が示されている。

第五章「『夜の寢覚』と長恨歌―帝と寢覚上の造型―」では、『夜の寢覚』における帝(冷泉院)については、「末尾欠巻部分」の従来の復元内容は、寢覚上の拒否

により、帝の恋が叶うことなく閉じられたものと推定されてきたために、『竹取物語』の帝的な位置付けとする見方が多かった。それに対して、「寢覚上偽死事件」「まさご」勘当事件」には、いずれも帝の深い関与がうかがわれること、さらには物語発端部での「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という天人の予言との関わりから見て、帝は物語の構造に関わる重要な位置にいたことを、『長恨歌』にかかわる説話からの影響に注目することで、より補強しうることを論ずる。

第六章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分における立后と立坊」では、「末尾欠巻部分」における「石山の姫君立后」と「内侍督腹の皇子の立坊」という「慶事」は、従来は「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という天人の帝に関わる予言の実現であり、寢覚上の幸福の象徴として捉えられてきた。だが、その背景には、寢覚上の夫であった老閔白の次女が、寢覚上と間違えられて盗み出されたという不幸な事件があったことを考えれば、これ以後の寢覚上をめぐる不幸な事件の端緒として位置づけるべきで、予言の実現という慶事とは言えないことを説く。

第七章「寢覚上の宿命―第三部の構造をめぐって―」では、『夜の寢覚』の第三部（巻三〜五）に見られる女主人公寢覚上の詳細な心理描写については、寢覚上が自身の深層心理に気づき、苦悩する様子が描かれているように見えることから、そこに「主題の深化」や「物語の変容」を読み取る見方が中心となっている。しかし、第四部「末尾欠巻部分」に想定される帝と寢覚上との物語からすると、中世王朝物語に散見する「しのびね型」の物語の展開との類似性が認められ、そこに描かれるのは、男君への不信から孤独を深めてゆく女主人公の心理であって、それが後に帝の接近を招く契機となっていることを指摘する。

第八章「『夜寢覚抜書』の方法―第二場面と『小夜衣』との関連を中心に―」では、近年その存在が明らかになった『夜寢覚抜書』には、『夜の寢覚』の「中間欠巻部分」から三場面、「末尾欠巻部分」から二場面、いずれも和歌を含んだ計五場面が記されている。その内の第二場面の詞書部分は、従来は、原作の文章をダイジエスト化したものとされていた。ところが、先行物語の本文をそのまま引用した

箇所が多い『小夜衣』の文章の中に、『夜寢覚拔書』第二場面の詞書部分と類似する本文が記載されていることから、少なくとも『夜寢覚拔書』の第二場面は、ダイジェストではなく、原作をそのまま抜き出したものと推定できることを説く。さらに、残る四場面についても、第二場面と同様に、詞書部分は登場人物の心情の流れを重視する形で、原作の地の文が抜き出されていたことを推定する。

第九章「改作本『夜寢覚物語』の方法―女主人公の人物造型の改変をめぐって―」では、いまだ十分とは言えない改作本『夜寢覚物語』の女主人公寢覚上の人物造型の改変が、どのような改作の方法によるものかという視点から論じている。すなわち、原作『夜の寢覚』と比較すると、改作本では、①女君の不幸の原因となった帝との関わりを、物語冒頭の予言とともに省略していること、②女君の不幸を予想させる原作の「楊貴妃」的性格をすべて取り去って「天人」的なものに改変することで、女君と周囲との確執を弱め、女君と男君の和歌の贈答で最後を結ぶハッピーエンドへと物語を無理なく導く手法が認められることを明らかにした。

第二部「平安後期物語・中世王朝物語をめぐって」は、『夜の寢覚』を除く、平安後期・中世王朝物語の中から、なお多くの課題を残す『狭衣物語』『小夜衣』『かばね尋ぬる宮』『松陰中納言物語』を取り上げ、四章（第十～十三章）にわたって論じている。

なお、この第二部は、副論文として提示した既刊単著『中世王朝物語の表現』（平成一一年刊行。全三三八頁）での研究を継承するものである。副論文は、以下の十章で構成されている。第一章「中世王朝物語における表現の問題」、第二章「『恋路ゆかしき大将』の成立」、第三章「『松陰中納言物語』の成立」、第四章「『松陰中納言物語』における敬語の特殊な用法について」、第五章「『木幡の時雨』の文章―先行物語からの影響（二）―」、第六章「『あきざり』の文章―先行物語からの影響（二）―」、第七章「『小夜衣』の引き歌について」、第八章「『狭衣物語』と百番歌合」、第九章「『狭衣物語』と『風葉和歌集』」、第十章「資料編大覚寺本『小夜衣』翻刻」。以上のように、六編の中世王朝物語を取り上げて、それぞれ



の表現の特徴と影響関係について論じる。併せて、大覚寺本『小夜衣』の全文を翻刻して掲載している。

本論文第二部の各章の要旨は以下の通りである。

第十章「『狭衣物語』跋文の解釈についての試論」は、『狭衣物語』の内閣文庫本を初めとする一部の伝本に存在する跋文は、『狭衣物語』作者の立場で記されたものとされてきた従来の把握に対して、跋文全文の語句と解釈に再検討を加えた結果、「『狭衣物語』を読んだ読者の感想」という立場から書かれたものと理解するのが妥当であることを説く。

第十一章「『飛鳥井物語』の変貌―『小夜衣』女性主人公像を中心として―」では、『小夜衣』の女主人公の人物造形には、『狭衣物語』の飛鳥井女君や、宰相中将妹君からの影響が顕著であるが、『狭衣物語』の飛鳥井女君は登場する場面で処女性を疑われる、女君としては相応しくないイメージが付与されていた。そこで、『小夜衣』の女君は、後に狭衣帝の后となる宰相中将妹君の人物造形と組み合わせ

せることにより、飛鳥井女君の魅力をも生かしつつ、男君に相応しい女主人公として造形されたものであり、そこに、より面白い物語を、より魅力的な主人公を創造しようとする中世王朝物語の工夫を見出そうとする。

第十二章「うづもれぬかばね」の物語―『かばね尋ぬる宮』の復元試論―では、散逸物語『かばね尋ぬる宮』は、『更級日記』に記された和歌を含む記述、および『狭衣物語』跋文、『風葉和歌集』の歌二首などから、悲恋の末に入水自殺した女君の埋葬されぬままの屍を、三宮が探す物語とされてきた。しかし、『更級日記』所載の和歌の解釈を中心に、『あきぎり』『いはでしのぶ』『むぐら』などの王朝物語のストーリーをも参考にしつつ、改めて復元を試みると、死亡したと思われた女君が実は生存しており、三宮はそれを知らずに「埋もれない屍」、すなわち存在しない遺体を探し続けたという内容であったのではないかと推定する。

第十三章「松陰中納言物語」と聖徳太子伝―では、『松陰中納言物語』の主人公・松陰中納言が、恋の争いに敗れた山の井中納言の奸計により隠岐に流される

が、山の井一味の策謀が露見したことで、松陰は京に戻り繁栄するという内容の物語の前半に、主人公の弟が東夷征討の折に得た宝珠を、後に御堂建立の際に、地中より掘り出された石の筥の上にその宝珠をささげると、中に観音の姿が現じたという挿話があるが、それらの素材には、中世の聖徳太子伝承からの顕著な影響が見られることに注目して検討を加えることで、善人が栄え悪人が仏縁に導かれるといった中世的な物語へと変貌するこの物語の構造を明かにする。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文『『夜の寢覚』の構造と方法―平安後期から中世への展開―』（平成二三年八月三一日発行、笠間書院）は、『夜の寢覚』を中心とする平安後期の物語が、どのような構造と方法によって描写されているか、そして内容がどのような工夫を経て中世王朝物語へと展開されていくかを捉えようとするものである。

本論文の構成は、序章、第一部『『夜の寢覚』―欠巻部分の復元と物語の構造―』（第

一（九章）、第二部「平安後期物語・中世王朝物語をめぐって」（第一〇～一三章）、および終章からなる。

本論文の中心は、第一部で九章を要して論じられている『夜の寢覚』にある。本物語は、五巻のみが現存しているが、その内容は、第一部（巻一～二）、第二部（中間欠巻部分）、第三部（巻三～五）、第四部（末尾欠巻部分）の四部に分けられており、第二部・第四部は、巻数が不明の欠巻部分であって、本来の物語内容は判明していない。ただし、第三部までは、『夜の寢覚』の改作本である『夜の寢覚物語』が存在していることから、おおよその内容は把握できるが、第四部（末尾欠巻部分）については、関連資料も少なく、筋の展開や最終的な物語の結末も、ほとんどが不明のままである。そのため、姉大君の夫となる男君が、結婚前に箏の琴の音に惹かれて契りを結んだ中の君（大君の姉・寢覚上・女主人公）が、懐妊・出産・悲恋などを通して味わうこととなった、女として母としての心の掘り起こしが末尾欠巻部分でも継続し、それを描くことが『夜の寢覚』の主題

であったとの想定が、現在までの研究の実態である。

それに対して、本論文では、関連資料である『無名草子』や、『寢覚物語絵巻』詞書第三段、『拾遺百番歌合』、改作本『夜寢覚物語』、『夜寢覚抜書』『伝慈円筆寢覚物語切』などの新旧資料の全てを詳細に読み直すことで、第四部（末尾欠巻部分）の内容を復元し、従来の推定を大幅に修正すべきであることを論じている。

その中でも、第一章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の復元―新出資料の解釈をめぐる問題―」で、いまだ十分に確認できていない「寢覚上偽死事件」以降の物語展開について、「寢覚上は偽死事件後、在俗のまま、子息まさこに発見され、男君とも再会したが、冷泉院にその所在を察知されることを恐れて隠れ住み、後に、「まさこ勘当事件」を解決しようとして院に許しを願い出た」とする新たな復元内容の想定は評価できる。さらに、第二章「『夜の寢覚』末尾欠巻部分の構造―新旧資料の解釈の再検討―」において、「寢覚上偽死事件」について記す『無名草子』の「死にかへるべきほう」の語句を細かく検討することで、寢覚上が「秘法秘葉な

どにより一旦死んで、蘇った」とする従来の解釈に対して、「一旦は仮死状態になった寢覚上を、帝（冷泉院）が世間には死亡と信じさせておいて取り籠めた事件」であって、帝が強く関与していたとする想定は、物語冒頭の天人の予言とも関わるもので、以後の『夜の寢覚』研究において、避けて通れない重要な指摘である。

『夜の寢覚』に関わる第一部での九章にわたる論述の要点をまとめると、以下の三点となろう。①第三部における中の君（寢覚上）の一連の心理描写は、寢覚上が男君に不信感を抱き孤立していく姿であり、それは後の帝の接近に不可欠のストーリー展開であること。②末尾欠巻部分の「寢覚上偽死事件」「まさこ君勘当事件」は、寢覚上と帝との強い関わりにおいて捉えられるべきものであること。③物語当初で、中の君（寢覚上）に琵琶の秘曲を伝授した際の天人による「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という予言は、物語の山場として末尾欠巻部分において実現されたものと理解すべきであること。以上の三点である。

後半の第二部「平安後期物語・中世王朝物語をめぐって」は四章で構成され、『夜の寢覚』以外の平安後期・中世王朝物語の中から、『狭衣物語』『小夜衣』『かばね尋ぬる宮』『松陰中納言物語』について、作品それぞれが有する特質と、それを獲得するに至った作者の工夫を検証することで、中世王朝物語へと変貌していく物語の構造について論じる。

なお、この第二部は、副論文として提示した既刊単著『中世王朝物語の表現』（平成一一年刊行。全三三八頁。世界思想社）での研究を継承するものである。副論文は十章で構成されており、『恋路ゆかしき大将』『松陰中納言物語』『木幡の時雨』『あきぎり』『小夜衣』『狭衣物語』の、六編の物語を取り上げて、表現面の特徴について論じており、その研究成果は本論文の第二部の論考へと継承されている。

以上のように、本論文は『夜の寢覚』の末尾欠巻部分を中心に、新旧資料の再検討を通して物語内容について新たな復元を試み、「国王まで伝へたてまつりたまふばかり」という天人の予言に即応した物語展開を読み取ろうとする、意欲的

な論考である。

ただし、課題も残る。論文名の「構造と方法」のうち、「方法」については必ずしも論文内容とは一致しておらず、『夜の寢覚』を論じた第一部（九章）と、それ以外の第二部（四章）とでは構成・内容面でのバランスに欠けている。また、中世王朝物語への展開を考える上に、中世の聖徳太子伝承や竹取伝承に対して、より広い視野から考察を加える必要もあろう。しかし、そうした点についても論者は自覚しており、その後も考察を深めつつ継続して論文を発表しているなど、今後に向けてさらなる研究の進展が期待できる。

よって、本論文の提出者である大槻福子は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があると認められる。



平成二十四年七月十八日

主查 國學院大學教授

豊 島 秀 範  
①

副查 國學院大學教授

秋 澤 互  
①

副查 実践女子大学教授

横 井 孝  
①

【訂正】

12頁 11行目：大君の姉↓大君の妹